

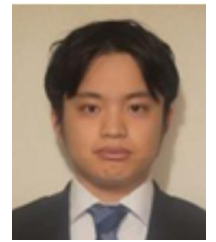
東日本大震災被災地域における高齢者のつながりと孤独感に関する定性的研究

ー 陸前高田市小友町地区の事例ー

Keywords

孤独感 つながり 高齢者
東日本大震災 定性的分析

DZ21027栗田 秀史



1. 研究背景

日本では少子高齢化が進んでおり、特に地方において顕著である。こうした中、内閣府¹⁾の調査によれば、孤独感を感じる高齢者が2～3割程度いることが明らかとなっている。高齢者の孤独感は、生きがい喪失や生活不安、介護や死亡リスクの増加、消費者被害、高齢者の犯罪、孤立死など、様々な問題を引き起こすとされており、その解消は極めて重要である。赤嶺・新城²⁾は、家族の中で相互補助が減少したこと、および単身世帯の増加が進行したことが、高齢者の孤独感の増加に寄与していると指摘した。今後も単身高齢者の増加が見込まれる中、高齢者の孤独感の解消には、地域社会など家族以外の人とのつながりを構築していくことが重要であることが示唆される。

加えて、人とのつながりは、通常時の孤独感の解消だけでなく、災害などの非常時においても重要となる。川脇³⁾は、平時からの地縁活動や市民活動が、東日本大震災後の支援・受援に与える影響について、被災地住民の意識調査データを用いて分析した。その結果、平時における地域活動への参加が活発であるほど、震災後の共助活動の可能性が高まることが示された。具体的には、地域での地縁活動や市民活動の活性化が、震災後のボランティア活動や自治会・町内会の復旧・復興活動、さらには大学や企業の社会貢献活動にも影響を与えていることが確認された。また、遠藤⁴⁾は、東日本大震災後に被災三県（岩手、宮城、福島）で、家族や地域など人とのかかわりの重要性が再認識され、社会的参加が社会の質向上に寄与する意識が高まったことを示した。

以上のように、高齢者の孤独感の解消や震災などの災害時の共助において、人とのつながりが重要であり、つながりを強化するための方策を考える必要がある。そして、東日本大震災のような大きな出来事は、人とのつながりの重要性を人々に再認識させることが示唆される。

2. 研究目的

そこで本研究では、東日本大震災後の高台移転地域に居住する高齢者を対象とした詳細なインタビュー調査を実施し、人とのつながりの形成過程やその継続・中断要

因、つながりに対する東日本大震災の影響を分析し、人とのつながりの強化につながる知見を得ることを目的とする。加えて、UCLA孤独感尺度⁵⁾をインタビュー結果に適用して、つながりの変化がもたらす孤独感の変化についても把握する。

3. 研究対象地域の概要

対象地域は、陸前高田市小友町である（図1）。小友町は中心部に平野が広がる東西が海にはさまれた地域で、人口は1,777人（2023年住民基本台帳）である。地域内には23の部落と呼ばれる自治単位がある。東日本大震災の際には、平野部に位置していたJR東日本大船渡線の旧小友駅を中心とした人口密集地域であった新田、三日市、両替部落の大半が津波の被害を受けた。そのため、現在は高台の岩井沢、松山、西之坊部落への移転が進んでいる。

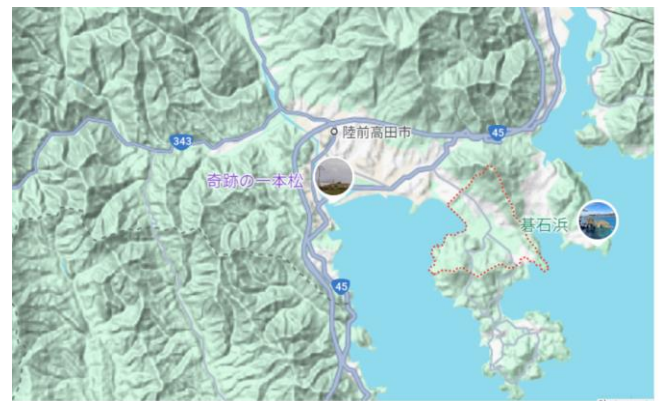


図1 陸前高田市小友町

引用元：google社「googleマップ、Google Earth」

4. 研究方法

4.1 半構造化インタビュー調査

(1) インタビュー項目の作成

高齢者一人一人のつながりの形成過程やその継続・中断過程、東日本大震災のつながりへの影響を分析するため、本研究ではアンケート調査等の量的調査ではなく、質的調査手法である半構造化インタビューを実施して、データを収集する。質問項目は、生まれてからこれまで

人とのつながりについて、そのきっかけや継続・中断状況およびその理由についての質問、東日本大震災とつながりに関する質問とした。また、日本語版UCLA孤独感尺度を参考に、孤独感の状況を把握できる質問も用意した。

(2) インタビュー調査の実施

インタビュー調査は、陸前高田市小友町に現在在住している60歳以上の高齢者5名を対象に実施した。対象者の概要を表1に示す。サンプリングは偶然法で行い、自宅を訪問して調査協力を得られた方を対象に実施した。インタビュー内容が極めてプライベートな内容となるため、データは匿名化し、個人情報の管理には最大限の注意を払った。

表1 インタビュー対象者

	a氏	b氏	c氏	d氏	e氏
年代	60代	80代	70代	80代	60代
性別	男性	女性	女性	女性	女性
部落	新山	岩井沢	両替	柳沢	柳沢

4.2 インタビュー調査結果の分析

(1) 孤独感に関する分析

インタビュー調査結果のうち、孤独感に関する回答結果を使用して、対象者ごとに日本語版UCLA孤独感尺度による孤独感の分析を行った。なお通常、孤独感尺度は、対象者に定型の質問を行って孤独度を測るが、本研究では定型質問ではなくインタビューの中で語られた情報を分析者が孤独感尺度に質問に当てはめて点数化を行った。

(2) グラウンデッドセオリーアプローチによる分析

半構造化インタビューの結果は、質的調査の分析で良く用いられるグラウンデッドセオリーアプローチ (GTA)⁶⁾で行った。まず、インタビューの逐語録を作成し、これを分析単位に分割する切片化を行った。次にそれらに内容を簡潔に示すラベル付けを行い、複数のラベルをカテゴリーに纏めるオープンコーディングを行った。その後、カテゴリー同士を関連付ける関連図を作成した。最後に関連図を基に、高齢者のつながりについてのストーリーラインを作成した。

5. 調査・分析結果

5.1 対象者のインタビュー結果の概要

対象者のインタビュー結果の概要を以下の通りである。

(1) a氏

幼少期は地域の人々とつながりがあったが、地元の知り合いの少ない高校に進学し、そこで新たな友人をつくった。就職後は地元を離れ、転勤を繰り返しながらも各地で新たなつながりを作り、結婚して二人の子供を得た。仙台在住時に被災。退職後は地元に戻るが、地域活動に参加したがなかなかなじめない。職場のつながりは切れ、一人の趣味が多くなった。その後、パソコン教室に通い

始め、多世代の友人を得た。共助の重要性は理解しているため、地域とのつながりを深めたいとは考えている。

(2) b氏

幼少期に父と死別し、母と妹と暮らし、地域の人々と関係を築いた。チリ地震で避難し、避難先の人とその後も親しい関係を維持した。高校・関東の大学で友人を広げる。教員となった後も多くの出会いがあり、結婚した。震災で自宅が津波の被害に遭い、旧友や親戚を頼って現在の部落に移った。震災の共通体験もあって、移った先の部落の人とも関係を構築した。その後、ガーデニングとボランティア等を通じて新たな繋がりも築いた。震災を機に連絡を取れるようになった人々も増え、つながりが日々広がっている

(3) c氏

代々農業を営む家の次女として生まれ、地元で育ち、学校や地域のつながりを作った。中学卒業後、農業関係の仕事に就き、職場結婚し、退職した。結婚を機に現在の部落に住み、地域や檀家との繋がりを大切にした。震災後、同じ部落の多くの人が集団移転したため、その人たちとの関係は薄くなった。しかし残った人との定期的な地域活動や親友との関係を通じて繋がりを深め、大事な繋がりとなった。震災を経て一層強化された地域との絆が、現在の日々の生活を支えている。

(4) d氏

実家は地元の名士であり、幼少期は家族や地元の友人との密なつながりを持った。高校・大学・就職では、深いつながりには至らなかった。大学進学を機に地元を離れた。退職後に地元に戻り、そこで被災した。地域活動を通じて被災者の支援を行った。被災者支援等で大きな被害を受けた人とそうでない人の対立があった。現在は、伝統行事の運営や手芸の趣味を通じて、地域との関係性を深めている。

(5) e氏

陸前高田市の中心部出身で、父の仕事の関係で引っ越しが多く、地域と深い関係性を築けなかった。就職後も職場でも深いつながりはなかった。結婚後、小友町の現在の部落に移住した。震災時はまだ働いていたが、部落長をしていた義父を見て、地域復興に関わりたいという思いから地域の役割を担うことを決意した。退職後は、地域活動を通じて地域とのつながりを深め、現在は園芸を通じて周囲の人々と関係を築いている。

5.2 孤独感に関する調査・分析結果

図2に対象者ごとの孤独感尺度を示した。なお、点数が高いほど孤独感が高いことを意味している。今回調査した5人とも、孤独感尺度の平均的な点数とあまり変わらない値になっていた。しかし、インタビュー中で語られた出会いや東日本大震災がなかった場合の点数を計算したところ、孤独感の点数大きく変化したことから、これ

らが孤独感に大きな影響を与えたことが示唆された。インタビュー結果を、孤独感という視点で詳細に分析すると以下のように整理できた。

(1) つながりの多極性とつながりの比重

分析の結果多極的なつながりを持つグループ（b氏・c氏）と1つのつながりの比重が重いグループ（a氏・d氏・e氏）に分類できた。前者のグループは、様々なつながりがあり、環境変化やつながりの喪失が起こった場合も、他のつながりが機能して孤独感は増大しない一方後者のグループは、震災や知り合いの引っ越しなど何かしらの環境変化が発生することによって孤独感が飛躍的に増大するという結果となった。

(2) セーフティーネットとしての部落の存在

今回の調査対象地域では、部落のつながりが強く残っており、5人とも何かあったときに助け合える存在の一つとして部落の存在が挙げていた。

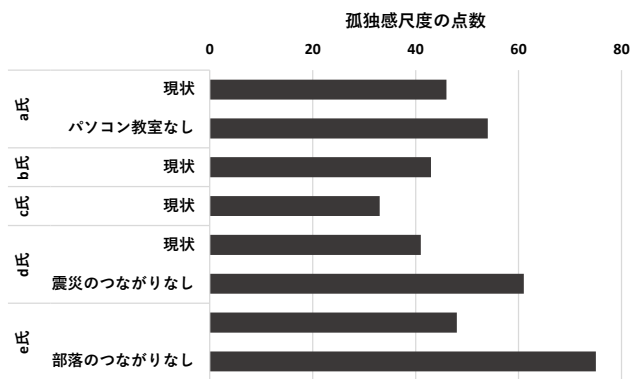


図2 インタビュー対象者の孤独感尺度

5.3 GTAによる分析結果

GTAによる分析で作成した関連図を図3に示す。また、関連図を基に作成したストーリーラインは以下の通りである。

つながりは年齢によって変化する。幼少期には家族とのつながりが中心となる。青年期になるにつれて、学校や地域に所属するようになり、特に田舎では地域社会が重要な役割を果たす。小中学校時代の地域的なつながりは家族的な関わりが強く、顔見知りが多いため、卒業後も長期間にわたって助け合う関係が続くことが多い。高校以降は、家族や地域のつながりが徐々に薄れ、職場や結婚を通じて新たな家族とのつながりが強くなる。老年期では、職場という集団から離れ、親や配偶者との死別、子どもの独立により家族とのつながりも薄れていくが、地域とのつながりは残り続ける。

人生の中でつながりを維持するためには、毎日顔を合わせる事が重要である。上記のそれぞれの年齢では、顔を合わせることで単純接触が促され、日常の会話が生まれ、つながりが維持される。ただし、顔を合わせていれば深いつながりになるわけではない。地域や職場のつ

ながりが義務的に感じられる場合もあり、深い関わりを築くためには個人的なつながりや趣味の共通点が必要である。また、祭りやイベントなどで共通の目標や目的に向けて努力することも、関係を深める要因となる。

この地域でのつながりに大きな影響を与えた要因のひとつとして、東日本大震災が挙げられる。一部の人々は家族や知り合いを失い、つながりが途絶えた。しかし、被災者同士が互いに助け合うことで、関係が深まることもあった。仮設住宅の集団移転や住環境の変化も、つながりに影響を与えた。震災後、助け合いの記憶が関係性を深める要因となった人々もいる一方で、公営住宅建設の遅れや集団移転から取り残された人々は、関係が切れるケースも多かった。震災では、共通の目標に向けて努力することや、趣味の共有や行動を通じて新たなつながりが生まれた。

6. 考察

グラウンデッドセオリーアプローチによる分析から明らかのように、人間関係のつながりは、年齢や環境の変化に応じてその形態や重要性が変化する。特に地方では、地縁に基づくつながりが大きな役割を果たし、幼少期から青年期に築かれた人間関係が長期間にわたって助け合いの基盤となることが多い。東日本大震災でも、部落のつながりが共助のもととなった。成人になると家庭や職場など新しい環境でのつながりが増え、地域とのつながりが薄くなることがある。しかし、老年期には退職や子どもの独立などにより再び地域社会とのつながりが重要になる。

孤独感尺度の分析から、つながりの多様性は、孤独感に大きく影響することが分かった。孤独感は、震災や引っ越しなどの環境変化で顕在化し、地域社会を含めた多様なつながりの存在が重要であることがわかる。また、部落などの地域社会とのつながりは、高齢者のセーフティーネットとしての役割を担っている。地域社会とのつながりは、日常の交流や自治活動を通じて構築され、物理的な支援だけでなく心理的なサポートも提供している。その結果、個々の孤独感が軽減されるだけでなく、地域全体の絆も強化されている。

最後に、東日本大震災のつながりや孤独感への影響については、震災によって、これまでのつながりの一部を喪失したり、対立があったりした一方で、共助や被災体験、復興を通じて新しいつながりを構築したり、深めたりした事例もあった。

7. 結論

本研究では、東日本大震災後の高台移転地域に居住する高齢者を対象とした詳細なインタビュー調査を実施し、人とのつながりの形成過程やその継続・中断要因、つな

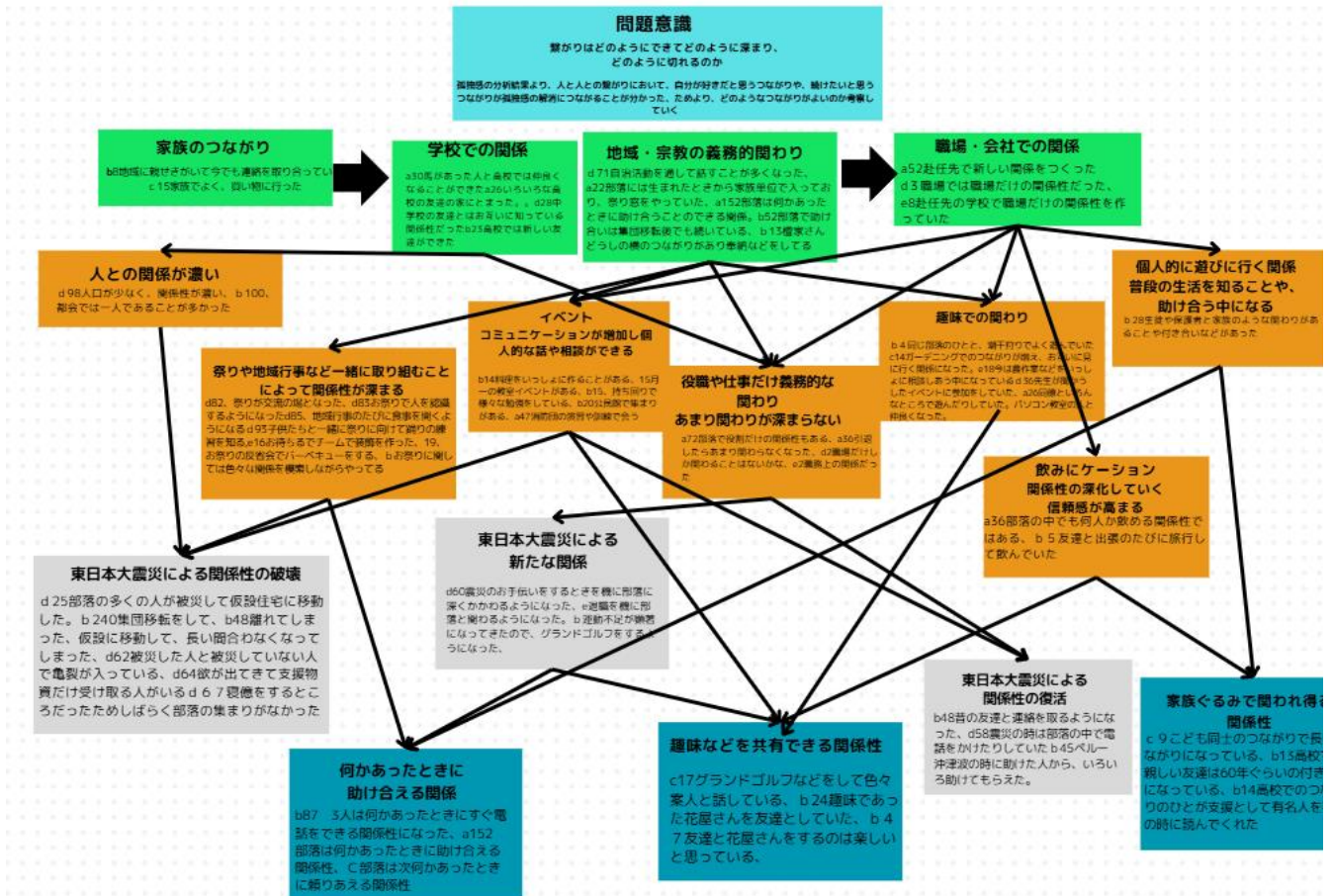


図3 GTAIによる分析で導き出されたつながりに関する関連図

がりに対する東日本大震災の影響の分析を行った。その結果、以下のような知見を得た。

地方の地域社会においては、小中学校時代に築かれた地縁に基づくつながりが、長期間にわたり助け合いの基盤となることが多い。地域社会のつながりは、日常の交流や自治活動によって関係は築かれており、物理的な支援だけでなく心理的なサポートも提供している。その結果、個々の孤独感が軽減されるとともに、地域全体の絆が強化されることがわかった。また、地域社会を含めた多極的なつながりは、環境の変化や既存のつながりの喪失に柔軟に対応する能力を持つ。そのためひとつのつながりだけでなく、多様な関わりを持つようにすることが重要である。

今後の課題は、地域社会を含めた多様なつながりの形成をどのように促していくか、という点である。東日本大震災は、大きな環境変化であり、つながりの喪失や希薄化をもたらすこともあったが、被災体験や復興を通じてつながりの再構築や深化ももたらした。様々な体験や目的を共有できる場やコトを提供していくことが、地域社会を深めた多様なつながりをつくりだすことに重要であると考えられる。

参考文献

- 1) 内閣府 (2021) 「令和3年度高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査」 https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/r03/zentai/pdf_index.html
- 2) 赤嶺伊都子・新城正紀 (2006) 世帯携帯からみた地域在住高齢者の支援—単独世帯に焦点をあてて—, 民族衛生, 72-5, pp191-207.
- 3) 川脇康生 (2014) 地域のソーシャルキャピタルは災害時の共助を促進するのか—東日本大震災被災地調査に基づく実証分析—, ノンプロフィットレビュー, 14, pp1-13.
- 4) 遠藤薫 (2013) 震災後社会における〈絆〉と〈自助〉のパラドックス—社会意識の階層的・年代的分断とその意図せざる帰結—, 理論と方法, 28-2, pp289-308.
- 5) 舛田ゆづり・田高悦子 (2012) 高齢者における日本語版UCLA孤独感尺度 (第3版) の開発とその信頼性居と妥当性, 日本地域看護学会誌, 15-1, pp25-32.
- 6) 木下康仁 (2001) 質的研究としてのグラウンデッド・セオリー・アプローチ—その特性と分析方法—, コミュニティ心理学研究, 5-1, pp49-69.